

美瑛の丘の風景の 成立メカニズムに関する考察

久保田 幸依¹・中井 祐²

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:sachie@t.u-tokyo.ac.jp）

²正会員 工博 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻（〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）

北海道上川郡美瑛町。ここに広がる丘は人々の生活を支える単なる畑であった。しかし、今では多くの人がこの畑を見に訪れる。ただの耕作地が眺めとしての価値を獲得し、人々にその価値が共有されたのである。つまりそこに「風景」が立ち現れた。本研究では、その美瑛の丘の「風景」の成立メカニズムを明らかにするため、文献調査およびヒアリング調査を行った。その結果、まず写真家の前田真三が「風景」を「状態」として表現し、それが「風景」として共有されるための素地をドラマ『北の国から』が形成し、写真ギャラリー拓真館、写真集『丘の四季』の出版および美瑛町のまちづくりを経て「風景」が共有され、大衆化するというメカニズムがあることを明らかにした。

キーワード: 美瑛, 風景の成立, 共有

1. はじめに

(1) 背景および目的



図-1 北海道上川郡美瑛町¹⁾

ここに一枚の写真がある。たった一枚の写真であるが、見る人はこれに様々な解釈を与える。ひとつは、美しい風景を写しとった写真であるとするものである。美瑛という感覚と関係なく、麦畑という単なる耕作地としての意味をそこに見る人もいるだろう。あるいは、線や色から成るただの図柄として鑑賞することも可能かもしれない。

上の写真は、北海道のほぼ中央に位置する美瑛町というまちで撮影された。地形はなだらかな起伏をなし、そしてどこまでもどこまでも畑が広がるというところである。以前は畑ばかりのこのまちに訪れる観光客はごくわずかで、しかもその行き先は山の方にある白金温泉であった。それが今、このまちには丘を見に、畑を見に来る

観光客が後をたたない。つまり、単なる麦畑が眺めとしての価値を獲得し、共有されたのである。

美瑛の丘、これが人々の生活を支える畑から、あるとき眺めとしての価値を有するもの、つまり「風景」へと変貌を遂げた。一体どのようにして「風景」が成立するのであろうか。本論文では、美瑛の丘を題材にしてそのメカニズムについて考察する。

(2) 既往研究

日本観光研究学会において『美瑛町における丘陵農地の観光対象化と観光地形成²⁾』、『美瑛町の風景をめぐる「まなざし」の変化³⁾』という論文が発表されている。前者は、前田真三の写真を契機として、美瑛の丘の風景が観光対象化されていく1970～80年代の社会的背景をまとめている。また後者は、美瑛へ向けられた人々の「まなざし」が、「山」に対するものから「丘」へ変化したということを論じている。しかし、いずれも「美瑛の丘の風景の成立メカニズムについて考察する」ことを目的とする本論文とは論点を異にするものである。

2. 仮説と概念の定義

(1) 作業仮説と方法

私たちがいつも見慣れたまち並みをふとしたときに美

しいと思ひ、そこに「風景」を見出すことがあるように、個人の身体を介して現前する「風景」がある。一方で、有名なまち並みのように世間的にその眺めとしての価値を認められ、集団表象として現前する「風景」もある。

美瑛の丘に「風景」を見に多くの人が訪れるということは、すなわち集団表象としての「風景」が成立したということに他ならない。だが、それが突如として現れると言うことは考えられない。そこで、次のような仮説をたてた。まずはじめにある個人が「風景」を発見し、それを何らかの手段で世の中に向けて表現する。そして、そこで表現された「風景」としての価値が共有され、「風景」が大衆化するというメカニズムである。また、このメカニズムにおいて発見および表現を行ったのが前田真三、そして共有、大衆化のきっかけとなったのがドラマ『北の国から』であると考えた。

以上の仮説をもとに、前田真三、ドラマ『北の国から』、美瑛町について、インタビュー調査、文献調査、写真の分析、映像の分析を行い研究をすすめた。

(2) 概念の定義

風景の成立を論ずる際に必要となる概念を、1 (1)をもとに次のように定義する。

「状態」 人間の意識から独立して存在する客観的世界。線、面、色、パターン。

(1 (1)でいうところの図柄)

「環境」 形而下の意味により分節された「状態」の認識像。

(1 (1)でいうところの耕作地としての畑、木、空)

「風景」 「環境」のもつ形而下の意味を超えて、人間が「状態」に形而上的価値を見出す現象。

(1 (1)でいうところの美しい風景)

3. 分析

(1) 分析対象の抽出

下のグラフをみると、美瑛町の観光客数が飛躍的に増えたのは1987年であることが分かる。この年、美瑛町には写真家前田真三のギャラリー拓真館がオープンした。そして、拓真館の入館者数と美瑛町の観光客数は同様の増加傾向を示している。そこで前田真三、美瑛町を中心に、美瑛の丘の風景の成立メカニズムにおいてポイントになると思われる出来事をまとめた。

また、美瑛から程近くにある観光地としても有名な富良野にも着目した。すると富良野の観光客数はドラマ『北の国から』が放送されてから大幅に増えていたため、

『北の国から』についてもポイントを大まかに整理した。

表-1 美瑛町観光入込み客数、拓真館入館者数の推移

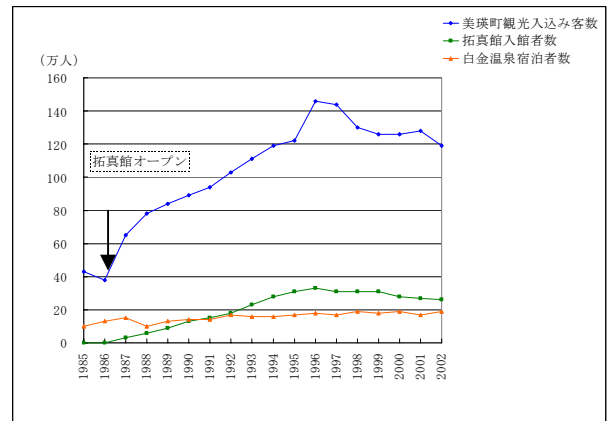


表-2 美瑛の丘の風景に成立メカニズムに関すると思われる出来事

	写真家 前田真三	『北の国から』	美瑛町
1971~	美瑛町で撮影開始		
1981	写真集に倉本が文章を寄せる	ドラマ放送開始 キャンペーンに前田の写真を採用	
1986	『丘の四季』		
1987			観光客増 拓真館 丘のまち

前田真三が初めて美瑛を訪れたのは1971年。そのとき美瑛の丘に魅せられて以来、様々なところで美瑛の写真を発表し、丘の写真家としての地位を築いていた。そして1986年美瑛の丘の写真のみを集めた初めての写真集『丘の四季』を発表した。そこで『丘の四季』におさめられた写真を分析し、前田真三が美瑛の丘を写真でどのように表現したかを探った。

次に、前田真三と『北の国から』の1981年の欄に注目すべき事実が記されている。『北の国から』のキャンペーンでは前田真三の写真を使い、またドラマの脚本家倉本聰が前田真三の写真集に文章を寄せている。これらの事実から、『北の国から』の映像と前田真三の写真の表現に何らかの類似点があるかどうかを調べてみることにした。分析にあたってはドラマのオープニング映像を用いた。それはオープニング映像がドラマにおいてそのストーリーとは関係のないところでドラマのイメージを形成するものであり、ドラマのキャンペーン写真と同じ特徴を有するからである。

(2) 写真集『丘の四季』の分析

a) 撮影地点と撮影方向のプロット

前田真三の御子息である前田晃氏へのインタビューを

通じて、各写真の撮影地点と撮影方向をそれぞれ地図上にプロットした。下図に示すように、同じ場所をさまざまな角度から撮影しているということが分かった。



図-2 撮影地点と撮影方向（一例）

b) 画角の算出

下表は撮影データに記されていたレンズの種類からおおよその画角を算出した結果である。全体の約70%が望遠で撮影されているということが分かる。つまり、我々が普段目にするよりも、断片的に空間を切り取っているということになる。

表-3 画角の算出

画角(°)		枚数(枚)		割合(%)
広角	92.3	14	6	17
	83.3		9	
標準	66.8	14	2	17
	65.2		1	
	56.6		3	
	56.1		8	
望遠	43.2	53	6	66
	41.7		3	
	39.5		1	
	35.5		4	
	25.0		3	
	22.6		16	
	18.0		12	
	15.1		4	
	9.0		4	

c) 構図と撮影対象による分類

構図と撮影対象による分類を行った。すると、全体の約75%が下に示すひとつの構図（近景、中・遠景、背景）と、10個の限られた撮影対象（地形、畑、畝、山、木および林、建物、太陽、虹、空、雲）の組み合わせからなる写真であることが分かった。この結果から言えることは、前田が撮影対象の組み合わせのおもしろさを巧みに表現しているということである。またその際、実際の写真を見てもらえれば分かるが、色を駆使した表現も行っている。

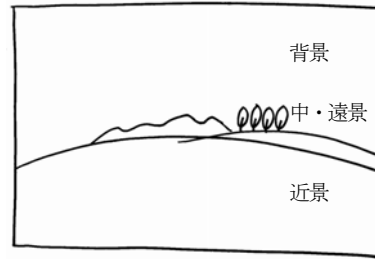


図-3 特徴的な構図



図-4 例1⁴⁾



図-5 例2⁵⁾

d) 前田真三の写真表現

以上の分析から分かるのは、様々な地点から同じ場所を撮影しているということ、断片的に空間を切り取っているということ、そして撮影対象の組み合わせのおもしろさ及び色を駆使しているということである。つまり、線・色・パターンを強調し、かつ風景の空間的断片を切り取っているのである。また、写真集等において前田がその表現について言及している箇所からは、前田は自分の目の前に現れた「風景」に感動しているが、それを象徴的な形で表現しようとしている姿勢を読み取ることができる。

要するに、前田が表現したのは形而下の意味も形而上的価値も伴わない「状態」そのものである。



図-6 「状態」の表現⁶⁾

(3) ドラマ『北の国から』のオープニング映像

オープニング映像に関しては、(2)c)と同様の構図および撮影対象による分類のみを行った。すると、ひとつの構図および限られた撮影対象の組み合わせで説明可能なものが全体の約60%を占めていることが分かった。これは、前述の『丘の四季』の分析と同様の結果を示している。実際に比較してみると、両者の類似性をはっきりとみてとることができる。つまり、『北の国から』のオープニング映像も「状態」の表現であると考えられる。



図-7 比較例1⁷⁾
(オープニング)



図-8 比較例1⁸⁾
(前田写真)



図-9 比較例2⁹⁾
(オープニング)



図-10 比較例2¹⁰⁾
(前田写真)

4. 考察

以上をもとに、美瑛の丘の風景の成立メカニズムについての考察を行う。

(1) 前田真三の個人の風景の発見

1971年に前田真三が美瑛の丘の「風景」を発見した。これは前田真三個人の「風景」の発見である。

その後、前田は自らが発見した「風景」を写真という手段で表現する。しかし、それは「状態」そのものの表現であった。つまり見る者にとっては、それまで見ていた畑という「環境」から、その形而下の意味を取り去られたものを目にするようになる。現実の場所としてではなく、色や形、パターンのおもしろさや美しさで訴えかけるものであった。それは人々の撮影された場所に行きたいという感情を誘発させるものではなく、一幅の写真にすぎない。まだ、一般の人々が感情移入することのない「個人の風景」の段階である。

(2) 『北の国から』による風景成立の素地形成

ところが、それが集団表象としての「風景」に発展するきっかけをつくる出来事が起こる。それが、ドラマ『北の国から』の放送である。

ドラマのオープニング映像も表現としては「状態」を印象的に見せるという点で、前田の写真と共通している。しかし、ドラマの場合はオープニング映像の場合とは異なり、今度は、人々はストーリーから得るさまざまな情感や共感、場合によっては登場人物に対する自己投影をも伴ってオープニングの映像を見ることが可能になる。つまり、本来「状態」表現でしかないイメージ映像に対

しても感情移入をしてしまうことになるのである。その行為は、ドラマというものの性質上容易に人々に共有される。ただし、人々はドラマのストーリーを介して感情移入を行っているため、イメージ映像に対しドラマの舞台である「富良野付近」という場所を想像する。

そして、このような見方を獲得した後、人々の前田写真に対する見方が変わる。3(3)で検証したように、前田写真とドラマのイメージ映像は「状態」表現である点で絵として酷似している。よって、前田写真を見た人は、そこに『北の国から』の感情移入を伴うイメージ映像の典型をみるのである。すると、「状態」の表現である前田写真であるが、今度は容易に共有され、普及することになる。ここで注意したいのは、この見方はまだドラマを通して獲得した方法を介してのものであり、人々は「富良野付近」という印象を伴うということである。

(3) 美瑛の丘の風景の成立

その後『丘の四季』が刊行され、拓真館がオープンする。町も「丘のまち美瑛」を掲げてまちづくりに取り組むようになる。すでに人々に共有されていた前田写真ではあるが、ここではじめて一般の人々に「美瑛」というはっきりとした地名を伴って認識されるようになる。そして、美瑛の丘の風景が成立した。しかし、この段階で訪れる人々は、丘の風景をみることで『北の国から』に対する共感に通ずる感情移入を伴う風景体験を目的としていると考えられる。

(4) 美瑛の丘の風景の大衆化

多くの観光客が訪れるようになり、「美瑛の風景」は「風景」としての地位を確立する。この段階になると、もう人々は感情移入や共感といった前提がなくとも風景を眺めることが可能になる。風景が大衆化し、その鑑賞自体が目的としたのである。

謝辞：本研究にご協力くださった皆様、どうもありがとうございました。心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 前田真三：『丘の四季』，グラフィック社，p30，1986
- 2) 小長谷悠紀・安島博幸・武井裕之：『美瑛町における丘陵農地の観光対象化と観光地形成』，日本観光研究学会第16回全国大会論文集，2001
- 3) 小長谷悠紀・安島博幸：『美瑛町の風景をめぐる「まなざし」の変化』，日本観光研究学会機関紙，2005
- 4) 前田真三：『丘の四季』，グラフィック社，p22，1986
- 5) 前田真三：『丘の四季』，グラフィック社，p45，1986
- 6) 前田真三：『丘の四季』，グラフィック社，pp.26-27，1986
- 7) ドラマ『北の国から』，フジテレビ

- 8) 前田真三：『丘の四季』，グラフィック社, p24, 1986
- 9) ドラマ『北の国から』，フジテレビ
- 10) 前田真三：『丘の四季』，グラフィック社, p55, 1986
- 11) 前田真三：『北海道 大地の詩』，集英社, 1981
- 12) 前田真三：『昭和写真・全仕事 SERIES13 前田真三』，毎日新聞社, 1983